2021/08/22
ヨハネの福音書　講解メッセージ⑥④
『絶望にこたえる神』ヨハネ 21:1-12

「この後、イエスはテベリヤの湖畔で、もう一度ご自分を弟子たちに現された。その現された次第はこうであった。シモン・ペテロ、デドモと呼ばれるトマス、ガリラヤのカナのナタナエル、ゼベダイの子たち、ほかにふたりの弟子がいっしょにいた。シモン・ペテロが彼らに言った。「私は漁に行く。」彼らは言った。「私たちもいっしょに行きましょう。」彼らは出かけて、小舟に乗り込んだ。しかし、その夜は何もとれなかった。夜が明けそめたとき、イエスは岸べに立たれた。けれども弟子たちには、それがイエスであることがわからなかった。」（ヨハネ 21:1-4）

ペテロたちが一晩中漁をしたのに、何もとれなかったというこの場面は、イエス様とペテロが最初に出会った場面を思い起こさせます。

一晩中網を打ったのに報われず、稼ぎがなかった弟子たちは、気落ちし、悲しみと絶望の中にいたことでしょう。このような時、イエス様は岸辺に立たれたのです。私たちが苦しみの中にある時、イエス様はそばに立たれるのです。光はやみの中に輝きます。苦しみに出会うことで神を求めると、光を見出すことができるのです。

しかし弟子たちは、光に気づいてもそれがイエス様だとはわかりませんでした。弟子たちは、イエス様が復活したと聞いた時も、それを信じませんでした。そのような弟子たちを、イエス様はさらに励ましてくださいます。

「イエスは彼らに言われた。「子どもたちよ。食べる物がありませんね。」彼らは答えた。「はい。ありません。」イエスは彼らに言われた。「舟の右側に網をおろしなさい。そうすれば、とれます。」そこで、彼らは網をおろした。すると、おびただしい魚のために、網を引き上げることができなかった。」（ヨハネ 21:5-6）

イエス様は絶望の中にある弟子たちに声をかけました。今もイエス様は、聖書を通して、私たちに声をかけ続けてくださいます。

神様は、聞こえる声で語るわけではありません。そこで、人が神の声を聞くことができるように与えられた神の言葉、それが聖書です。私たちのいのちの土台は神様ですから、肉の体を通して聖書の言葉に触れると、御霊が助けてくださって、神様が語ってくださっていることがわかるのです。これが、神の言葉を聞くということです。

神の言葉はすでに与えられています。しかし、弟子たちが、イエス様がそばに立っておられるのに気づかなかったように、私たちも手元に聖書があるにもかかわらず神の言葉に気づかず、別のものでごまかそうとしてしまいます。苦しい時、聖書を読みましょう。今の時代、神の言葉をどこでも自由に手にすることができます。これは本当に素晴らしいことです。

さて、イエス様に声をかけられた時、弟子たちは、それに従うこともできたし、従わないこともできました。選択の自由は弟子の側にあったのです。しかし、弟子たちが素直に従ったことで、神様は奇跡を起こし、たくさんの恵みが与えられました。ここからわかることは、

神様は霊的な面だけでなく、すべての面において助けてくださるということです。重要なことは、彼らが神の言葉によって、一歩前に踏み出したということです。

私たちにも、神様が用意しておられるものが必ずあります。神の励ましを聞いて、それを信じ、一歩を踏み出しましょう。

> 「そこで、イエスの愛されたあの弟子がペテロに言った。「主です。」すると、シモン・ペテロは、主であると聞いて、裸だったので、上着をまとって、湖に飛び込んだ。」
> （ヨハネ 21:7）

「イエスの愛された弟子」とは、この福音書を書いたヨハネだと言われています。ヨハネがイエス様だと気づくと、ペテロもそれを認めて、湖に飛び込みました。

夜通し働いたのに魚が獲れず、イエス様のことばに従ったときに豊漁になったという出来事は、イエス様とペテロの出会いを思い起こさせます。あの時ペテロは救われて、イエス様についていくことにしたのです。苦しみの中で主に従ったら、多くの恵みを受けたことを再体験して、ペテロは、「この方はイエス様だ」という衝撃を受けました。

「後ろを振り向くな」と言われますが、唯一忘れてはいけないものがあります。それは、神の恵みです。どうして自分が救われたのか、思い起こしてみましょう。私たちは皆、自分の努力ではなく、神様によって救われたのです。

誰もが、苦しい時に神様に励まされた経験があるはずです。誰もが神様の恵みを受けて生きています。その恵みを忘れていけません。忘れると道を失ってしまいます。しかし、神の恵みを思い起こすと、勇気が与えられます。

> 「しかし、ほかの弟子たちは、魚の満ちたその網を引いて、小舟でやって来た。陸地から遠くなく、百メートル足らずの距離だったからである。」（ヨハネ 21:8）

この時、他の弟子たちは湖に飛び込んだりせず、そのまま魚を乗せて小舟で岸までやってきました。しかし、ペテロは、魚には目もくれず湖に飛び込みました。つまり、ほかの弟子たちは、生活の糧を確保してから神のもとに行こうとしましたが、ペテロは、富に目を向けることはしなかったということです。ペテロは、神を第一としたのです。実は、これこそ、神が求める弟子の姿なのです。

> 「イエスは別の人に、こう言われた。「わたしについて来なさい。」しかしその人は言った。「まず行って、私の父を葬ることを許してください。」すると彼に言われた。「死人たちに彼らの中の死人たちを葬らせなさい。あなたは出て行って、神の国を言い広めなさい。」別の人はこう言った。「主よ。あなたに従います。ただその前に、家の者にいとまごいに帰らせてください。」するとイエスは彼に言われた。「だれでも、手を鋤につけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくありません。」
> （ルカ 9:59-62）

この時、親の葬儀も、家族を優先することも、イエス様は承認しておられません。神を第一にするなら、言い訳をすることなく、神を第一にするように教えておられます。

ですから、私たちも今一度自分と神様との関係を見直してみましょう。自分にとって、礼拝の優先順位はどうなっているのか、神が第一だと言いながら、実際には時間ができたら礼拝に行こうと他の用事を優先させてはいないだろうか。自分が心惹かれるものにお金を使い、神様への献金を後回しにはしていないだろうか。……どんなに自分を正当化しても、人々がそれで納得したとしても、神様の前に自分を正直に照らしてみましょう。神の戒めは、神を第一にしなさいです。なぜなら、それが私たちにとってどれだけ益となるかを神様は知っておられるからです。

ペテロの行動はまさにこれです。もちろん、富を確保してからイエス様についていく人のことも、神様は愛しておられます。しかし、私たちが目指すべきはペテロの姿です。神を第一にすることです。

ペテロがイエス様を第一にできたのは、多くの罪を赦されたことを自覚していたからです。イエス様を裏切ったにもかかわらず、イエス様はそのことに一切触れず、ビジョンを与えてくださいました。その喜びゆえに、この方以外のことは考えられなかったのです。

> 「だから、わたしは『この女の多くの罪は赦されている』と言います。それは彼女がよけい愛したからです。しかし少ししか赦されない者は、少ししか愛しません。」」
> （ルカ 7:47）

私たちの借金は天文学的借金です。神様はそれを帳消しにしてくださいました。そのことに気づけば、神を愛さずにはいられなくなります。この女性の涙は、罪が赦された感謝と喜びの涙です。放蕩していた自分を神様は受け入れてくださったのだと気づくとき、「神を第一にしろ」と言われたから第一にするのではなく、自分がしたくてするようになるのです。

> 「こうして彼らが陸地に上がったとき、そこに炭火とその上に載せた魚と、パンがあるのを見た。イエスは彼らに言われた。「あなたがたの今とった魚を幾匹か持って来なさい。」」（ヨハネ 21:9-10）

なぜイエス様は、彼らのとった魚を持ってくるように言われたのでしょうか。

イエス様が持ってくるように言われたということは、これは神への捧げものです。イエス様は、彼らが得た魚の中から、神様に捧げものをすることを教えておられるのです。それは、私たちの心が神に向くようにするためです。

私たちが得た富は、本来自分のものではなく、神様の助けによって得られたものです。しかし、人は富に目が向くと、いつの間にかこの世のものが大切になるという習慣が身についてしまいます。そこで神様は、私たちが富に惑わされないために、捧げものを通して心を神に向けられるように教えてくださっているのです。

> 「シモン・ペテロは舟に上がって、網を陸地に引き上げた。それは百五十三匹の大きな魚でいっぱいであった。それほど多かったけれども、網は破れなかった。」
> （ヨハネ 21:11）

この時獲れた魚は、通常だと網が破れる量であったことがわかります。漁師にとって魚は富です。その富を神に返すことで、富に振り回されるのではなく、むしろそれを管理できる者になるのです。

私たちはともすると、富に惑わされてせっかくの人生をお金の心配だけで終わらせてしまうことになります。神様は私たちに、計り知れないほどの富を与えてくださっているのですが、神に感謝してささげることを忘れるようになると、網が破れ、手にしたものが無駄になってしまうのです。神のものは神に返して、網を破れさせないように生きていきましょう。

> 「イエスは彼らに言われた。「さあ来て、朝の食事をしなさい。」弟子たちは主であることを知っていたので、だれも「あなたはどなたですか」とあえて尋ねる者はいなかった。」（ヨハネ 21:12）

心理学者のユングは、敬虔なクリスチャンであることが知られていましたが、ある時「自分は神を信じているのではない」と言って、人びとを驚かせたことがあります。彼はこのように言いました。「私は、神を信じているのではなく、神を知っているのです。」

神との関係が、信じるか信じないかではなく、「知っている」という関係になれば幸いです。それは友の関係です。トマスは最初イエス様の復活を信じないと言っていましたが、イエス様が彼に寄り添ってくださり、イエス様と向き合ったことによって、その関係に至りました。

頑張って信じるのではなく、当たり前に神を知っている関係を築いていきましょう。「罪が赦された」「神に愛されている」、それらを実感することによって、見えない神を体験することができます。それが、神を知るということです。これは、旧約聖書の中で、神が与えた契約の中に書かれています。

> 「彼らはもはや、それぞれ隣人に、あるいはそれぞれ兄弟に、『主を知れ』と教えることはない。彼らがみな、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るようになるからだ。――主のことば――わたしは彼らの不義を赦し、もはや彼らの罪を思い起こさないからだ。」（エレミヤ 31:34　新改訳 2017）

誰もが主を知るようになるから、誰も教える必要がなくなる時が来る、と主は言われました。弟子たちがイエス様に「あなたはどなたですか」と尋ねなかったのは、皆がイエス様であることを知っていたからです。

イエス様を知るとは、どのようなことでしょうか。それは、「罪が赦されたことを知る」ということです。イエス様は、「彼らの不義を赦し、彼らの罪を思い起こさない。」と言われます。それを体験したら、うれしくて仕方なくなります。こうして神との関係が、さらに深いものになっていくのです。

私たちも、神であり主であるイエス様と、このような関係を築くことができれば幸いです。